

文化ときめき

ナチス迫害下の名演、名盤

大原哲夫

「モーツァルト・伝説の録音」制作

昨年(2014年)は第1次世界大戦勃発から100年、今年(2015年)は第2次世界大戦終結70年の節目の年を迎える。音楽は何よりリアルに時代を映す。今、SPレコードに遺された名録音を再び世に問う『モーツァルト・伝説の録音』全3巻の制作に取り組んでいく。第2巻の執筆、編集を終えたばかりだが、中にはいくつも特筆すべき演奏がある。

ナチスに迫られたブルーノ・ワルター「写真」が、自らピアノを弾き、ウィーン・フィルを指揮した「ピアノ協奏曲第20番K466」、1937年の録音



もそのひとつ。

33年にヒトラーが首相に就任。ユダヤ人だったワルターのライプツィヒの演奏会はナチスの妨害により中止。その後、ワルターはベルリンへ、そこでも命を狙われ、ついにウィーンに逃れたのだった。38年、ナチスによるオーストリア併合の前年

この録音は、収録音源の中でも白眉のものだ。40年、イギリスのレコード雑誌グラモフォーン誌10月号は、「この演奏は、彼のウィーンへの白鳥の歌だ」と評した。

ナチス政権下、ワルターだけではなく、ユダヤ系演奏者の多くは職を失い、あるいは亡命せざるをえなかった。作曲家・ピアニストのエルヴィン・シュルホフのように「殞(ことごと)音(ね)楽(がく)の烙印(おとしご)をおされ、収容所で命を落とす人もいた。またオズヴァルト・カバ

スタのように戦後になって、ナチスに協力したことを糾弾され、夫人とともに自殺した悲劇の指揮者もいた。

音楽家は、自らの生き方を問われた。演奏者は、一期一会ともいえる録音の機会に彼らの演奏技術の粋を、思いのたけをレコード盤に遺した。わけてもモ

ーツァルトの録音には、心を揺さぶられるものが多い。

過酷な戦時下にあつて、モーツァルトの曲の持つ、深い哀しみ、限らない喜びは、彼らの生きる力となり、彼らの救いだっただけではないだろうか。戦争が名盤を生んだといえは誤解を招くが、多くの名演、名盤がこの時代に遺されている。

(エディター)

『モーツァルト・伝説の録音』(飛鳥新社)は、第1巻「名演

アイオリニストと弦楽四重奏団」、第2巻「名ピアニストたち」が発売中(各巻税込み2万5000円)。戦前・戦中のSPレコードに残された名演を、新レコード復刻の第一人者、新志篤(あつた)さんがリアルな音でCD計36枚に復刻した。最も古い録音は1905年だ。演奏・録音の特徴や時代背景などを解説した書籍が付く。第3巻「名指揮者と器楽奏者・歌手」は11月に刊行予定。問い合わせは飛鳥新社(☎03・32633・7770)。